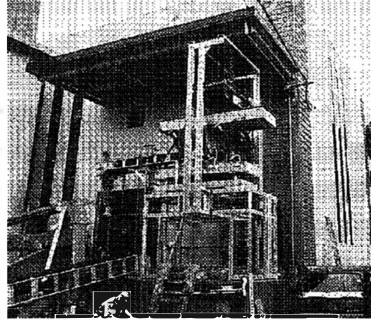


台湾に新型溶融炉

残灰溶かし
ガラス状に
2005年にも実証炉

溶融炉開発の日本環境保全（茨城県牛久市、古渡周作社長）は、灰を溶かしてガラス状に固める高温溶融炉を台湾のごみ処理施設に導入する契約をこのほど台北市と結んだ。台湾科技大学（台北市）と協力し、実証炉を二〇〇五年にも稼働させる。同社は台湾での実績をもとに、日本国内やアジア諸国での受注拡大につとめる。



国内の試作炉（熊本県人吉市）

物質が溶け出す恐れがあったという。古渡社長は「灰をガラス状に固めることで環境汚染を防げるだけでなく、再利用すればごみの埋め立て量も減らせる」と話す。

台北市のごみ処理施設

台湾科技大学と協力

台北市環境保護局と実証する。

証炉の開発契約を結んだ。重油を水と混合燃焼して炉を高温にする同社の技術を提供し、台湾科技大学と実証炉を共同製作する。炉の処理能力は一日十二トで、灰の処理後の体積は五分の一になる。固形物は建築材料や道路の舗装材などに再利用できるとい

再利用できるという。

従来は灰を捨てる際にセメントや凝固剤などで固めてから埋め立てていたが、重金属などの有害

引用)2003年4月8日 日本経済新聞地方経済面(p.41)

ご注意
過去に当社が原情報を著作した新聞・雑誌等の記事は、画面上の閲覧のみが可能です。これら記事は過去に公開されたものですが、現状で利用する際には著作権等が発生する場合があります。利用をご検討の方は当社にご相談願います。
日本環境保全株式会社

では一日七十一百トの灰を排出している。同社は「灰が見込める」とみて、台北市に正式採用。北市内の民間企業と合弁会社を設立して共同で処理事業を進める計画だ。